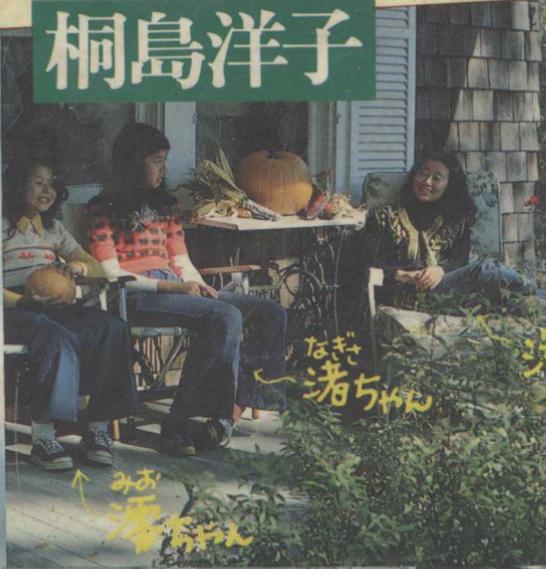


# マザー・グースと 三匹の子豚たち

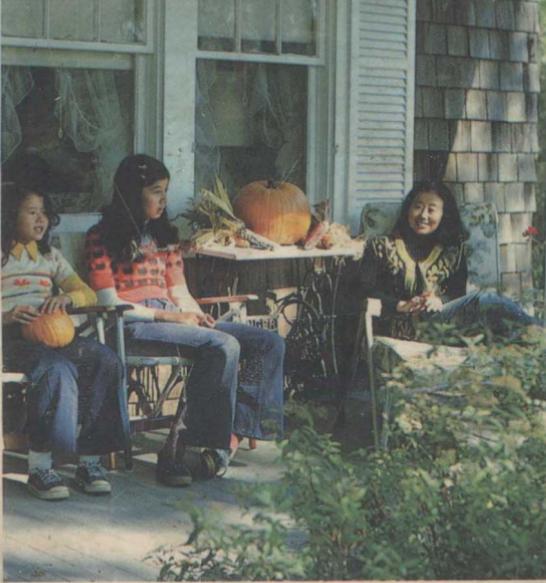
桐島洋子



108



108



マザー・グースと  
三匹の子豚たち

桐島洋子

文藝春秋

### 著者略歴

1937（昭和12）年東京生まれ。56年都立駒場高校卒業。56～64年文藝春秋に勤務。64年よりフリーのルボライターとして海外各地で取材活動を続け、72年にアメリカ在住の体験を綴った「淋しいアメリカ人」で第三回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。著書に「淋しいアメリカ人」（文藝春秋）「風の置手紙一渚と澪と舵へ」（R出版、角川文庫）「女がはばたくとき」（PHP）「女ざかりの美学」（じゃこめい出版）「聰明な女性は料理がうまい」（主婦と生活社）「さよならなんてこわくない」（交通公社）等多数ある。

### マザー・グースと三匹の子豚たち

定価 880円

1978年4月30日第1刷

1978年7月15日第3刷

著 者 桐島洋子

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3

電話 03-265-1211（代）

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Yoko Kirishima 1978 Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

# 目 次

私のエミール	後ろ手	13
どこへ行こうか		
家主	故郷	25
初登校	31	
車はいらない	37	
大寒波	49	
元旦	59	
百人一首	69	
75		
	43	7
	37	19
	31	
	25	
	13	
春が来た	買い出し	
狩猟採集		
魚の頭		
われら海の子		
サマー・キャンプ		
旅暮らし		
孟母はどこへ		
わらべうた		
サバイバル		
再会		
145		
	99	
	93	
	87	
	81	
111		
127		
133		
139		

日本語	211	キャンプ生活	親子試合	223
ブロイラー	205	マンハッタン	住い	157
ハロウイーン	199	ヤード・セール	169	151
収穫	193	サマー・ドッグ	163	
勉強	187	別れ	235	ベイク・セール
子豚たち その後	241	子豚の反乱	229	
	253		217	

写真 装幀  
平野甲賀  
アーネスト・バロス

マザーニースと  
三四の子豚たち



# 私のエミール



P. O. Box 421 East Hampton N. Y.

11937, U. S. A. —これがこゝま、私と日本の現実とをつなぐ唯一の窓口である。人里離れて住む私の庵は郵便配達の圈外だから、町の郵便局まで大遠足して私書函を開かなければ、外界の消息は手に入らない。

郵便物の束をつかみ出すと、私はそのまま近くの原っぱに駆けて行き、古い風車の下の日だまりに腰を下ろして、ときには枯れ草にまみれて寝ころんで、ゆづくりと手紙に読みあける。

「あなたは凄い。」タンマをかけて一抜けたのできる人だから」  
——今日着いたある人の手紙の一節は、ち

よつと私の気に入つた。

別に凄くはないけれど、たしかに私はタンマをかけて一抜けた。帰りなんいざ、田園まさに荒れなんとす——ここ数年、心身の内部で地鳴りのように高まつていたこの呼び声にやつとこたえて旅立つて、流れ着いたアメリカの田舎町で、この上もなく静かな休暇の日々をいとおしんでいる。

この休暇の目的は、大きく分けて二つある。

一つは、四十代を目前にした私自身の、生命の洗濯と充電である。女の平均寿命七十七年の半分はすでに過ぎたのだ。人生の折り返し点で一休みし、自然の中に身体を伸ばして深呼吸しながら、後半生の方向にじっと心を澄ませてみたい。

それに、あまりにも忙しい日常の中で、知りたいこと、考えたいこと、読みたい本が、押せ押せにたまりたまつて、これ以上放置したら收拾がつかなくなりそうだ。

こんなに不勉強な人間が、いつの間にか「ヒヨーロンカ」という世界に類なき奇怪な職業の一味に加わつて、あれこれしたりげな発言を続けてきたのは、まことにオソレを知らぬ所業であつた。

子供三人引つ抱えての世渡りに、オソレなど知つていられるかという自己弁護も、いくぶん生活に余裕ができた今では説得力がない。せめてこの休暇の間に、できるだけの勉強をしておこう。勉強などしてなまじモノが見えはじめたらよいよおそろしくて端的な物言いができるくなり、ヒヨーロン商売あがつたりになるかもしだれないが、それならそれでよいではないか。また新しい道がひらけるだろう。小説も書いてみたいし、なにかの研究にのめりこんだりもしてみたい。一度しかない人生の、もう半分しか残っていないのかと思うと、したくことがある過ぎて、失業なんかちつともこわくない。

もう一つの目的は、家事育児に心ゆくまでいそしむことである。ホーム・メイキングという仕事に深く愛着する私は、主婦権を人手に委ねたりしたら、生活の根っこをなくしたようで生きた心持ちがしない。しかし、夫という協力者に恵まれない不運もあって、経済的責任は人一倍重いから、男に伍して、というよりそれ以上に猛烈に頑張って働かなければならぬ。したがって、主婦業に費やしうる時間や力はかなり限られたものになる。もつときめこまかく家庭を耕したいという欲求不満に、私はいつも苛立っていた。とりわけ、いま育ち盛りの子供たちが生活者としてしつかり根を張るために、その土壌をできるだけ肥沃なもの

にしておきたい。

私の荒々しい遊牧生活の道連れにされた子供たちは、オンブやダッコの安逸をむさぼるひまなどあらばこそ、物心ついたときから、サッサと手を離して足早に先を行く母親のあとに、一生懸命つき従つて来るより他なかつたのである。乱暴な放し飼いが幸いほほいいメにて、かなりたくましく自立心の強い子供に育つたが、もちろん必ずしも私の趣味に合うことばかりではない。言葉づかいや行儀作法はひどいものだし、生活の技術や教養の程度も、私の子供時代に比べて格段に劣る。これはすべて、家庭教育の責任に属することだろう。すなわち、親の出る幕なのだ。

そうだ、ときには私も立ちどまつて振り向いて、子供たちとバッチャリ顔つき合わせ、私の知力と経験と偏見と哀歎とをぶちまけて、思いつきり彼らを鍛えてみよう。そう思い立つて、ついに私も『教育ママ』の仲間入りといふわけである。

しかし、きびしく子供を鍛えるためには、その優しいクッションになる自由空間が必要だ。コンクリートの壁や、危険な道路や、受験戦争の人垣に囲まれた逃げ場のない環境で、それ以上、子供を追いつめるような躊躇のムチは鳴らせない。

むかしの私のように、ひろやかな自然の中に解き放たれた子供たちとなら、容赦なくはげしい取つ組み合いができるだろう。また、四季の自然そのものが、すばらしい教師になつて、親に力を合わせてくれる。

つまりは『自然にかえれ』ということで、そんなことは二百年も前からジャン・ジャック・ルソーが叫んでいるのだが、人類はこのところ、どうやらその逆に逆にと道を選んでいるようだ。

アメリカに来る道すがら、ルソーの『エミール』を二十年ぶりに読み返した私は、現代の、特に日本の、教育の歪みをものの見事に見通したルソーの先見性に驚嘆した。

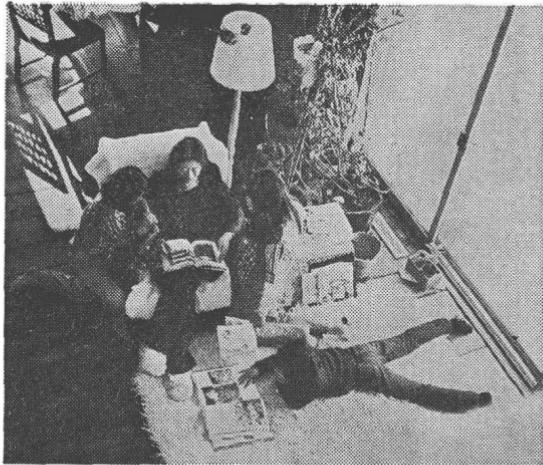
妻い男がいたものだなあ、かなわないなあ、恋人にするのは怖いけど、こういう天才の面倒を見るナントカ・ド・キリシマ侯爵夫人なんていう身分になつてみたい。そうしたら莊園の館にルソー先生をお迎えし、わが息子をエミールのように教育していただき。彼がどんなに気むずかしい寄宿人だろうと、私は喜んでサービスにつとめ、彼のお好み通り、野菜と乳製品中心の自然食に腕をふるおう。そのうち、ふと気がついたらもう一人子供が増えたりして……なんてあらぬことを考へてゐるうちに、飛行機はもうアメリカに着陸し、われ

に返つた一介の子連れ狼は、ルソー先生の贅沢な条件にはとても応じきれない私の貧しさにうなだれる。

いや、しかし、私だって彼にイバリたいことが一つはある。女中に次々と産ませた五人の私生児をすべて孤児院の前に捨て、ついに一人の子供も育てなかつた彼にひきかえ、私はともかくも三人の子供を自分で育てているのだ。

だから私が、あえてルソーの前に面を上げ、私自身の「エミール」の実践に挑むのも、それほど不遜なことではないだろう。

## 後ろ手



日本を発つすこし前、私は子供三人引連れて乗つたタクシーで、かなりはげしい衝突事故に遭遇した。ありうべからざる対向車が突然猛々しくフロント・グラスいっぱいに迫つて来た瞬間、私は咄嗟<sup>とっさ</sup>に大手をひろげて両脇の子供たちを抑え「こんな詰らないことで子供を殺されてたまるか」と心で叫びながら“敵”を睨みつけたものだが、そのときふつと「私はいつも後ろ手型だなあ」という奇妙な感慨にとらわれた。

会田雄次先生の『日本人の意識構造』によれば、危難に直面したとき、日本の母親は子供を胸に抱き込み敵に背を向けてヘナヘナとしゃがみ込んでしまうが、西洋の母親は後ろ

手に子供をかばい、敵に向かって立ちはだかり、活路を求めるそうである。この分類によれば、私はあきらかに後者に属する。

なにしろ私はいわゆる未婚の母で、かなり無茶な子産み子育てを強行してきたのだから、いわば毎日が危難の連続で、後ろ向きにしゃがみこんだりしてては破滅を待つだけだった。自分の稼ぎで子を養うより他ない母親にとつては、「仕事か育児か」などというあののどかな煩悶<sup>はんもん</sup>も存在しない。

とはいものの、会社勤めと子育ての両立はむずかしい。オテツダイサンという、その中途半端な呼称に似つかわしく頼りない女の子に家の守りを委ねて外に出るのは、ベトナム戦線の従軍体験よりもスリリングなことだった。しかも彼女たちはやめたいとなつたらもう待つたがきかず、パタンと即日消えてしまう。せめて後任が見つかるまで待つて、バトン・タッチをしていこうというほどの責任感さえ持ち合わさないので。

無責任女に子供をほうり出されたからといって、私まで無責任に欠勤するわけにはいかないが、幼い子供を一日中置き去りにしておくのも親として無責任なことだ。仕方なくぞろぞろと一連隊を率いて横浜から東京へ出勤し、会社に近いホテルのロビーで子供を遊ばせてお